ゲーテの言葉資料　　　　令和３年６月１９日（土）　いのちの躍動の舞――最も大切なもの

・1749年8/28 – 1832年3/22 （満82歳7カ月弱）

・イタリアにて、フィディアスの彫刻を描いた絵を見る。（1787年8/23：38歳時）

・イギリスの駐トルコ大使エルギン卿が、1802年～1812年の間に、パルテノン神殿の彫刻（の主なもの）をロンドンに運ぶ。ゲーテは、1816年以降、関心をいっそう強める。図版を入手したり。

・1819年9月にイェーナ大学の骨学研究所に、フィディアス作「馬」のコピーが陳列される。（10月初めにゲーテ見る。）

◎ゲーテの言葉『イタリア紀行（下）』（岩波文庫）から：

●①［1787年8月23日。バチカンにてミケランジェロの「最後の審判」等を見る。］

　私は、一たい**男一匹がどれだけの物を制作し、また成就し得るか**ということについて一個の概念でも得られるようにと、どれほど諸君もここにおられたらと願ったことであろうか！　シックストゥス礼拝堂を見ないでは、一人の人間が何をなし得るかを眼のあたりに見てとることは不可能である。偉大で有能な人物のことをたくさん人に聞いたり本で読んだりするが、しかし**ここにはそれが頭上や眼前に未だに生き生きとして存在するのである**。… 私は全く生まれ変り、改心されそして充実させられたからである。（53頁）

②　［同じ日の文章］昨日は騎士フォン・ワースリイのもとで多くの写生画を見た。彼はギリシア、エジプト等を旅行してきたのである。最も私の関心を引いたものは、アデンのミネルヴァ神殿の長押の中層（フリーズ）にある浅浮彫の写生であった。これは**フェイディアスの作品**である。**ここにある若干の簡素な像よりも美しいものとては、とうてい想像もできない**。

●③「博物学の図解一覧、とくに骨学の図解にたいする要望について」（1819年）

**芸術家は実は根源の馬（Urpferd）を創ったのである。彼がそのような馬を実際に眼で見たのか、心のうちで作り上げたのか、そのどちらにせよ。すくなくともわれわれには、それは最高の詩の心と現実の感覚において描写されているように思われる。**

**（**sheint es **im Sinne der höchsten Poesie und Wirklichkeit dargestellt zu sein）**

◎エッカーマン『ゲーテとの対話』から。

●④　1828年10月20日（岩波文庫、山下肇訳）

ギリシャの美術家は、動物を描写する場合に、**自然の域に達しているどころか、自然さえもしのぐ域にまで達している**傑作を無数に見つけることができるからだ。

 　イギリス人は世界一の馬の鑑定家だが、それでもこの古代の二つの馬の頭を見て、これが形の点では完璧なもので、**今では全くこれほどの品種は地球上に存在していないと白状しているくらいだ**。

⑤　それがギリシャの最盛期につくられたこの頭なのだ。とこれでこういう作品は、なるほどわれわれを驚嘆させるが、といって、あの頃の美術家たちが現代とはちがって、**もっと完全な自然をもとに制作した、などと決して思いこんだりしてはいけない**。

⑥　むしろ、時代や芸術が進歩するにつれて、美術家自身もひとかどのものに成長して、結局**個人的な偉大さをもって、自然と向かいあった**、と考えるべきなのだ。 …

 ⑦（エッカーマン）「閣下は、今しがた、ギリシャ人は個人的な偉大さによって自然と向いあった、とおっしゃいましたが、けだし名言だと思います。この言葉を肝に銘じておこうと思います。」

⑧（ゲーテ）「そうだ、君。**何事も、この点が肝心だからね。ひとかどのものを作るためには、自分もひとかどのものになることが必要だ**。…

 　　　**Man muß etwas sein, um etwas zu machen**.

　古代ドイツにかぶれたこの国の美術家連中は、こんな事情をまるで知らないのだ。個性もひよわで、美術家としても無能なくせに、自然を模倣して、一人前の美術家だとうぬぼれているのさ。彼らは自然の下風に立っている。

⑨　しかし、**何か偉大なものを創ろうとする者は、自分の教養を向上させ、ギリシャ人みたいに、自分よりも劣っている現実の自然を自己の精神の高みにまで引き上げ、自然の現実の中では内部的な弱さやあるいは外部的な妨害のために単なる意図にとどまっているものを、現実に創り出さなければならないのだよ**。

Wer aber etwas Großes machen will, muß seine **Bildung** so gesteigert haben, daß er gleich den Griechen imstande sei, die geringere reale Natur zu der Höhe seines Geistes heranzuheben und **dasjenige wirklich zu machen, was in natürlichen Erscheinungen, aus innerer Schwäche oder aus äußerem Hindernis, nur Intention geblieben ist**.«

（亀尾訳）⓾　**偉大なことをしようと思ったら、自分の教養を高め、ギリシャ人のように、平凡なありのままの自然を、自分の精神の高さに持ち上げなければならないし、自己の内的な弱さや外的な障害のために自然現象の中において単に意図にとどまっているものを、現実のものとしなければならないんだ**。」

●⑪『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』　「フィディアス」は３巻18章に出る。

しかしながらもし人あって諸芸術が自然を模倣するゆえをもってそれを軽蔑せんとするならば、自然の事物もまた諸他のものを模倣することをもって答えればよい。なお進んで、**諸芸術は人の眼をもって見るところのものをそのままに模倣するのではなく、それから自然が成りそれに従って自然が作用するところのかの理性的なるものにまで遡るのである**ことをもって答えればよい。

… daß ferner **die Künste** nicht das geradezu nachahmen, was man mit Augen siehet, sondern **auf jenes Vernünftige zurückgehen, aus welchem die Natur bestehet und wornach sie handelt**.

⑫　更に言うならば、**諸芸術はまた自分自身から多くを生み出し、他方、自然が完全となるに欠けているものを数多く付け加える**、

　――**芸術は自分自身のうちに美をもてるがゆえに**。

⑬　それゆえに**フィディアス**は、何ら肉の眼に見ゆるものを模倣したのではないが、神を刻むことができた。彼は、もしツォイス［ゼウス、ジュピター］がわれわれの眼にふれることもあったらこうもあらわれたであろうという姿を心のうちに捉えたのである。

Ferner bringen auch die Künste vieles aus sich selbst hervor und fügen anderseits manches hinzu, was der Vollkommenheit abgehet, **indem sie die Schönheit in sich selbst haben**. **So konnte Phidias den Gott bilden**, ob er gleich nichts sinnlich Erblickliches nachahmte, sondern sich einen solchen in den Sinn faßte, wie Zeus selbst erscheinen würde, wenn er unsern Augen begegnen möchte.

●⑭　『ヴィンケルマン』（芦津訳）

ひとたび芸術作品が産み出され、その理想的な現実とともに世に姿を見せるや、それは持続的な効果をもたらし、最高の効果を発揮する。

⑮　なぜなら芸術作品とは全体の力から精神的に展開されるものであり、それゆえ**すべての卓越したもの、尊敬と愛に値するものを取り入れ**、**人間の形姿に魂を吹きこむことによって人間を人間以上に高め**、その生活および行為の円環を完結し、過去と未来とを包括する現在のために人間を神化するからである。

⑯　私たちが古代人の叙述、報告、証言などから解明できるように、かつて**オリュンピアのユピテル**を眺めた人々は、このような感情に捉えられた。

人間を神に高めるために、神が人間になったのである。彼らは至高の尊厳を目（ま）のあたりにし、最高の美に胸を打たれた。

⑰　この意味において私たちは、「**この作品を見ずに死ぬのは不幸である」と心からの確信をもって語った**古代人たちを是認すべきであろう。…

　友情と美の二つの要求が同時に一つの対象において満たされるとき、人間の**幸福と感謝の念**は、きわまるところを知らない。そして人間は、彼の所有物のすべてを、**帰順と崇拝のささやかな印として捧げたいという気持ちになる**であろう。

●⑱『ドイツ彫刻家協会』1817年７月２７日（新井靖一訳）

　しかしながら、造形芸術においては**考えたりしゃべったりすることはまったく容認しがたく、また無益であり、芸術家はむしろ価値ある対象を自分の目で見ることが必要である**、この理由から彼は非常に古い時代の遺物に心を向けなければならない。

**（zu denken und zu reden ganz unzulässig und unnütz ist）**

⑲　そしてそういうものは何といっても**ペイディアス**とその同時代人の作品のうちにしか見出すことができないのである。現在われわれはきっぱりとこのように言うことができる。というのも、この種の申し分ない遺物がすでにロンドンにあるからであり、したがってわれわれはどの造形芸術家にもただちに**適切な典例【真の泉**（**die rechte Quelle［泉、根源］**）**】**を指示することができるのである。

⑳　**それゆえドイツのいかなる彫刻家も、己れの自由にしうる資産のすべてを使って、あるいは友人、後援者、その他の偶然によって彼に与えられるすべてを利用して、英国に旅し、そこにできるだけ長く滞在するようにせねばならない**。というのも、彼の地ではまず第一にエルギンの大理石像が、次いでかの地にあるその他の、博物館に併合されているコレクションが、**およそ人類の住む世界においてこれ以上のものは見出されないような機会を与えてくれるからである**。

㉑　彼の地についたなら彫刻家はなにをおいてもまず**パルテノン**とフィガリア**神殿のほんのわずかな遺物をも大いに気を入れて研究してもらいたい**。（**studiere er vor allen Dingen aufs fleißigste**）

●㉒「**芸術作品の真実と真実らしさについて」**（新井靖一訳）

（では言って下さい。なぜそういう私にも完全な芸術作品が自然の作品に見えるのでしょうか。）

　それは、**その芸術作品があなたのよりよい本性と一致しているからです**。**自然を超えているが、しかし自然の外に出ていない**からです。

　完全な芸術作品は人間精神の作品であり、この意味において**自然の作品**でもあるのです。

　しかしながら、ばらばらな対象が一つにまとめられ、もっとも低俗な対象すらその意義と価値が認められることによって、**芸術作品は自然を超える**のです。

　それは、調和のうちに生れ、形成されている精神によって把握される必要があるのです。そしてこのような精神は、卓越したもの、それ自身で完成したものを自分の本性にも合ったものと思うのです。

◎参考　小林秀雄『モオツァルト』（新潮文庫等）

㉓　エッケルマンによれば、ゲエテは、モオツァルトに就いて一風変った考え方をしていたそうである。如何にも美しく、親しみ易く、誰でも真似したがるが、一人として成功しなかった。幾時か誰かが成功するかも知れぬという様な事さえ考えられぬ。元来がそういう仕組に出来上っている音楽だからだ。はっきり言って了えば、人間どもをからかう為に、悪魔が発明した音楽だと言うのである。ゲエテは決して冗談を言う積りではなかった。その証拠には、こういう考え方は、青年時代には出来ぬものだ、と断っている。（エッケルマン、「ゲエテとの対話」――一八二九年）ここで、美しいモオツァルトの音楽を聞く毎に、悪魔の罠を感じて、心乱れた異様な老人を想像してみるのは悪くあるまい。…

㉔　メンデルスゾオンが、ゲエテにベエトオヴェンのハ短調シンフォニイをピアノで弾いてきかせた時、ゲエテは、部屋の暗い片隅に、＊雷神ユピテルの様に坐って、メンデルスゾオンが、ベエトオヴェンの話をするのを、いかにも不快そうに聞いていたそうであるが、やがて第一楽章が鳴り出すと、異常な昂奮がゲエテを捉えた。「人を驚かすだけだ、感動させるというものじゃない、実に大袈裟だ」と言い、しばらくぶつぶつ口の中で呟いていたが、すっかり黙り込んで了った。長い事たって、「大変なものだ。気違い染みている。まるで家が壊れそうだ。皆が一緒にやったら、一体どんな事になるだろう」。食卓につき、話が他の事になっても、彼は何やら口の中でぶつぶつ呟いていた、と言う。…

㉕　震駭したのはゲエテという不安な魂であって、彼の耳でもなければ頭でもない。彼の耳が彼の頭の進歩について行けなかった、そういう事もどうもありそうもない話だ。…

㉖　妙な言い方をする様だが、聞いてはいけないものまで聞いて了った様に思える。…

二人［ゲーテとニーチェ］とも鑑賞家の限度を超えて聞いた。もはや音楽なぞ鳴ってはいなかった。めいめいがわれとわが心に問い、苛立ったのであった。…

㉗　この音楽が、ゲエテの平静を乱したとは言うまい。ファウスト博士を連れた彼の心の嵐は死ぬまで止む時はなかっただろうから。併し、彼の嵐には、彼自身の内的な論理があり、他人に掻き立てられる筋のものではなかった。…

㉘　彼の深奥にある或る苦がい思想が、モオツァルトという或る本質的な謎に共鳴する。

●エッカーマン『ゲーテとの対話』（上）1826年12月13日（水）

㉙　「たしかに、この若い人には才能があるよ。けれども、なにもかも独学で覚えたというのは、ほめるべきこととはいえず、むしろ非難すべきことなのだ。才能のある人が生れるとすれば、それはしたい放題にさせておいてよいはずはなく、立派な大家について腕をみがいて相当なものになる必要があるからだよ。

　先日私はモーツァルトの手紙を読んだが、彼のところへ作曲を送ってきた男爵にあてたもので、文面はこうだったと思う、

『あなた方ディレッタントに苦言を申さねばなりますまい。**あなた方はいつも二つの共通点が見られますから。独自の思想をお持ちにならないので、他人の思想を借りて来られるか、独自の思想をお持ちの場合は、使いこなせないかか、そのどちらかです。**』

　すばらしいじゃないか？　モーツァルトの音楽について言ったこの偉大な言葉は、他のあらゆる芸術にも通用するのではなかろうか？」

　ゲーテはつづけた、「レオナルド・ダ・ヴィンチはこういっているよ、

…『あなた方の息子さんは、**遠近法と解剖学を十分に習得してから、りっぱな大家に師事させなさい**』と。

㉚　ところがだ、今どきの美術家連中ときたら、師匠のもとを離れるときになっても、まだその二つがろくに分らない始末さ。世の中もひどく変ったものだよ。…

　ところで私も、ドイツの画壇を５０年以上も見てきた。いや、ただ見てきたというだけではなくて、私の方からも働きかけるようつとめてきたのだが、今となって言うことができるのは、すべてが現状のままであるかぎり、ほとんど何も期待できないということだ。時代のよいものをすべてすばやく自分のものにして、それによってすべてのものを凌駕するような偉大な才能が現われなければならないのだ。その手段はすべて目の前にあるし、道は示され、軌道まで敷かれている。**その上今や、われわれはフィディアスの作品までこの目で見ることができるのだ。これは、われわれの若い頃には想像もできなかったことだよ**。」

●㉛（第三部1828年3月11日）

　つまり天才というのは、神や自然の前でも恥かしくない行為、まさにそれでこそ**影響力をもち永続性のある行為を生む生産力にほかならない**のだ。モーツァルトの全作品は、そうした種類のものだ。あの中には、世代から世代へと働きつづけ、早急には衰えたり尽き果てたりすることのない生産力があるのだよ。そのほかの偉大な作曲家や芸術家についても同じことがいえるよ。**フェイディアス（Phidias）**やラファエロは、その後何世紀にもわたって影響を及ぼしたではないか！　…　　**生産的な影響を与えつづけないような天才は存在しない**からだよ。

・㉜第三部1831年6月20日

モーツァルトがドン・ジョヴァンニを作曲した、などとどうして言えようか！　作曲する――まるで卵と小麦粉と砂糖をこねあわせてつくる一片のケーキかビスケットででもあるかのようだ！　――それは、部分も全体も**ひとつの精神から一気に注ぎだされ、ひとつの生命の息吹につらぬかれた精神的な創造なのであって、製作者はけっして、試みをおこなったり、継ぎはぎをしたり、恣意的な処置をほどこしたりはしていない。彼の天才のデモーニッシュな精神が彼を支配し、彼はこの精神の命ずることを遂行するよりほかなかったのだ**。（渡辺健訳）

●①『プロピュレーエン』序言（1798年）（新井靖一訳）から。

　芸術家にたいしてなされるもっとも高尚な要求はつねに、**自然をよすがとして、これを研究し、自然を模倣し、自然の現象に似たものを生み出すべきである**という、このことである。

　この要求がいかに大きいもの、「いな途方もないものであるかは、かならずしも十分に考慮されているとはいえない。真の芸術家でさえ修業が進んでゆくにしたがってようやくこのことを知るにいたる。**自然は芸術と非常な深淵によって隔てられており、天才ですらも外的手段なしにはこれを超えることはできないのである**。

　（芦津訳だと「**途方もない深淵によって分け隔てられ**」）

　自分の芸術作品に、**自然であると同時に自然を超えるものと思われるような内容と形式を与えうる**ということは、とりわけ近代においては、一層稀になっている。

②　イタリアにしばらく暮らしたことのある芸術家なら誰でもこう自問してみるがよい。古今の芸術の最高傑作を眼前にして、人間の形姿の釣り合い、形、性格を研究し、模倣し、泰然としてゆるぎないあの芸術作品に近づき、感覚的観照を満足させつつ、**精神を最高の領域にまで高めるような作品を創造するために、制作に刻苦精励しようという不断の向上心が自己のうちにひき起されなかってあろうか**。

だがその人も告白することになろう。**帰国後はだんだんとあの向上心も衰えざるをえなかったと。というのも、作品を本当に見、味わい、そしてそれについて考えることができる人はほんのわずかしか見いだされず、たいていは、作品をおざなりに眺め、勝手なことを考え、自分流に感じたり、味わったりしようとしている人しか見られないからである**。［ほんとそうだよなーby奘］

③どんなにひどい絵でも感覚と想像力に訴えることができる。それは、そのような絵でも感覚と想像力を動かし、解放し、自由にさせてくれるからである。**最高の芸術作品**もまた感覚に訴えかけるが、それは**より高次の言葉**であって、われわれはむろんこの言葉を理解しなければならない。**そのような芸術作品は感情と想像力を束縛し、われわれの恣意を奪う**。**われわれは完全なものを、好き勝手に処理し、支配することはできない。われわれはそれに自分を委ねないわけにはゆかないのだが、そうすることによってわれわれは高められ、改善され、ふたたび自己を手に入れるのである**。

（芦津訳「**それは感情と構想力とを束縛し、私たちの恣意を奪い去る。私たちは完全なものを意のままに統御し、支配することはできず、そこに身を委ねることを強いられる。それによって高められ、改革され、ふたたび自己自身を獲得するのである**。」）

④　なんらかの知識にたずさわる人は、**最高のものを目指すべきである**。知的理解と実地の仕事とは大いに違っている。というもの、実際の仕事においては誰でも、自分にはある程度の力しか与えられていないことをやがては知ってそれに甘んじなければならない。ところが知識や知的理解となるとずっと多くの人たちにこれを持つ能力があるからである。それどころか、**自分を捨てて、対象につくことのできる人、強情で、偏狭な我意をはって自己とそのつまらぬ偏見を自然と芸術の最高の作品のなかへ持ちこもうとしない人であるならば誰でも、そのような能力がある**と言えるのである。

（芦津訳「**自己を空しくして対象に従うことのできる人、頑固で偏狭な我意を通し、自己とそのちっぽけな偏見を自然と芸術の最高傑作のうちに持ちこむようなことをしない人ならば、誰しもその能力を有している**と言える。」）

⑤　しかし、われわれが**自分のうちにあるものをただ手軽に、また気楽に動かしているだけでは、自己を形成することにはならない**。

（芦津訳「しかし私たちが自己の内部にあるものを安易に、そして快適に働かせるだけでは、自己形成ということはありえない。」）

他の人間と同様、どんな芸術家も個別的な存在にすぎないのであって、つねに一つの面にのみ心を傾けるであろう。

それゆえ人間は、自分の本性に反するものであっても（was seiner Natur entgegengesetzt ist）、理論、実践の別を問わず、可能なかぎり自己のうちに取り入れなければならない。

軽々しい人は真剣さと厳格さを求め、厳格な人は軽やかで快適なものを、強い人は愛らしさを、愛らしい人は強さを念頭に置くがよい。こうすれば誰でも、自分の本性から遠ざかるように思われるだけ、**自分の本性をますます鍛える**ことになろう。（**seine eigene Natur nur desto mehr ausbilden**）

**いかなる芸術も人間全体を要求する。考えうる最高度の芸術は人間性全体を要求するのである。**

●⑥「さらに一言、若い詩人たちのために」（死後に発見された遺稿）（小岸昭訳）

われわれが師と呼ぶのは、その人の指導によってわれわれがたえずなにかある芸術の修練を重ね、しだいにわれわれが熟達してくるにつれて、実作で憧れの目標にもっとも確実に到達するために従うべき根本原則を段階的に教えてくれる人のことである。

そのような意味においては、**私は誰の師でもなかった**。しかし、一般にドイツ人、とくに若い詩人にとって私がいかなるものになったかを言うようにと求められるならば、私はたぶん彼らの**解放者**であると言うことができるであろう。というのも、人間は内面から生きなくてはならないように、芸術家も、たとえ彼がどんなふうに振舞ってみたところで、**つねにひたすら自らの個性を発揮してゆくほかない**のだから、やはり内面から制作しなくてはならないということを、彼らは私によって知ったからである。

そういう精神で芸術家が生気溌剌とたのしく仕事にむかうならば、彼の人生の価値を、高貴あるいは優雅を、時として生来彼に備わっている優雅な高貴さといったものをも、世に顕すことになるのは間違いない。

それはそうと、私はこうした仕方で誰に影響をあたえたかを、かなり正確に述べることができる。そこから生じてくるのはいわばある種の自然文学であり、そしてこうした仕方に頼るのでなければ、独創的なものは生れてこないのである。

　…というのも、文学においては、他人の、外的な尺度などというのは何の役にも立たないからである。

⑦ところで、なによりも肝要なことを手短かに述べておこう。若い詩人は、たとえそれがどんな形態をとるにしろ、**生きて働きつづけているものだけを表現せよ**。**いっさいの否定的精神、いっさいの悪意や悪口を、そして否定するしか能のないものをきびしく排除せよ**。**というのも、そうしたものからは何物も生れてこないからである**。

●⑪「ラオコーンについて」（芦津丈夫訳）

　真の芸術作品は、自然の作品と同じように、私たちの悟性にとってつねに計り知れないものである。それは観照され、感知される。それは心に働きかけるが、真に認識されることはなく、その本質や価値が言葉で表現されることは、なおさら稀である。